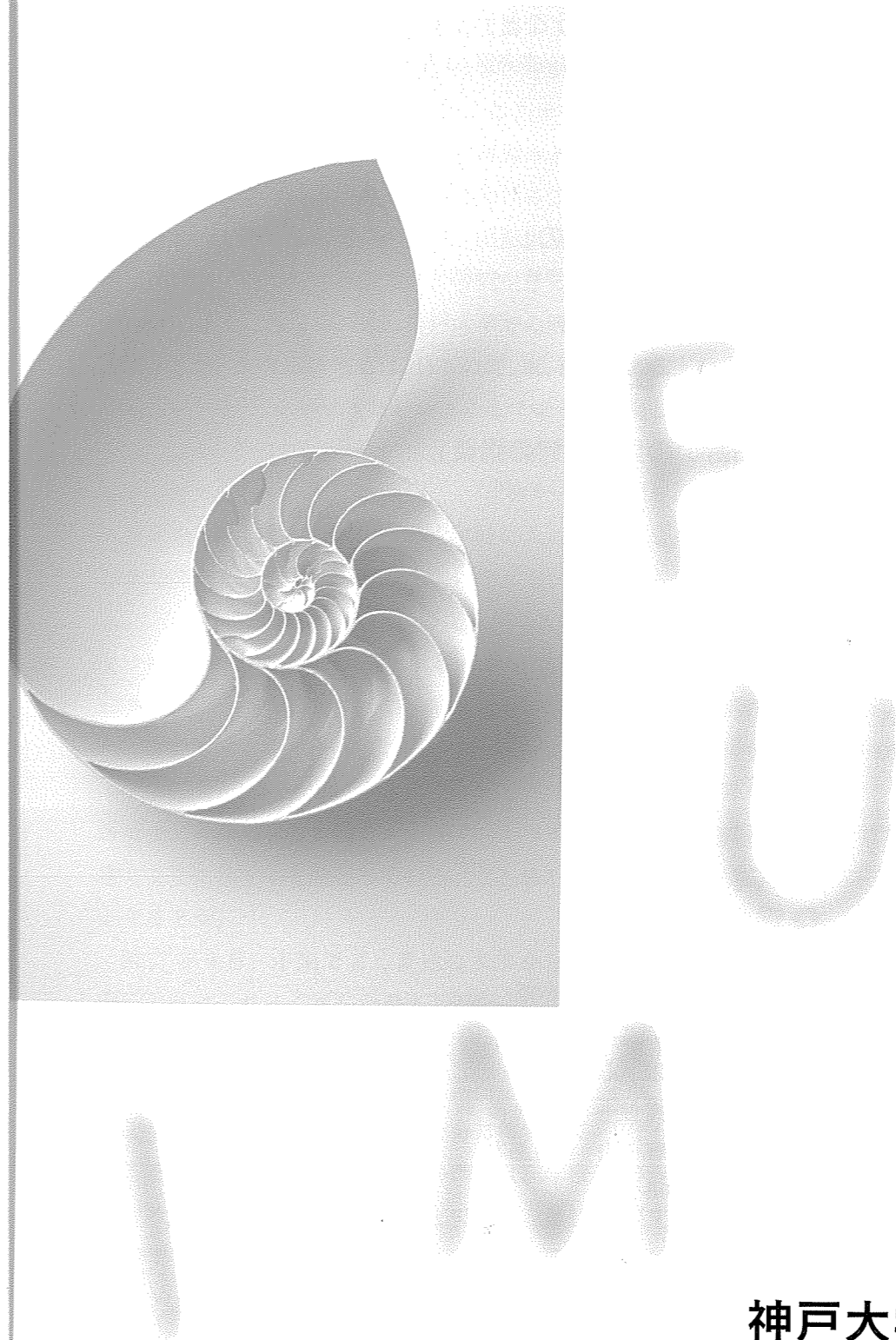


第13回
文窓賞優秀作品集



発行

2019年10月26日
神戸大学文学部同窓会
文窓会

<http://www.bunsokai.com/> (文窓会)
<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/> (神戸大学文学部)

2019年10月発行

文窓会

神戸大学文学部同窓会

第13回 文窓賞
学生レポートコンクール 入賞作品

優秀賞

文学部創立70周年記念特別賞

「留学するということ」

張 曉芸 (芸術学 博士課程前期課程 1年)

優秀賞

「忘れ得ぬもの」

山根 彩花 (英米文学 専修 4回生)

佳作

「二日酔いの男と哲学の講義」

上田 慎 (哲学専修 4回生)

新人賞

「学びたいこと」

石田 七海 (1回生)

◎ 選考会 2019年8月7日

◎ 選考委員

西川 京子 (審査委員長)

奥村 弘 学部長 (日本史学教授)

白鳥 義彦 副学部長 (社会学教授)

長坂 一郎 副学部長 (心理学教授)

武藤 美也子 日高 健一 三宅 征彦

田中 賢司 廣野 幸夫 吉田 浩次

中畑 寛之 津田 薫

優秀賞 文学部創立70周年記念特別賞

留学するということ

張 曉芸 (芸術学 博士課程前期課程 1年)

今私は、神戸大学に大学院生として留学している。去年の秋に院試に合格し、今年の春から大学院の勉強が本格的に始まった。ここまで、日本での留学は、知らずのうちに三年間ほど過ぎた。私の留学生活は、三つ時期に分けることができる。一つめは学部生のとき、山形大学への交換留学。二つめは東京大学で研究生としての一年半。そして三つめは、神戸大学での研究生生活である。地理的に言えば、日本の北、東、西、つまり日本の大半を巡ったということである。その点だけで、もはやほかの留学生の経験と異なると思う。

東大を二浪して、神戸大学の大学院に入った二ヶ月後、ある日学生ホールの前に佇んでいると、ちらっと「第13回文窓賞」の掲示が見えた。チラシを一枚手に取り、最初目に映ったのは「第13回文窓賞」の字形より小さい字で書いてあった「書いてみよう、自分のこと」である。

そうだなあ。初めて日本に留学したときから今まで、自分のことは自分にとって、もう十分書くことに値すると確信している。じゃあ、書いてみよう。

2017年9月、中国でごく普通の大学から卒業した私は、じっくりした考えと万全の準備を整えた上で、日本に留学することに決意した。じっくりした考えというのは、以前山形に一年ほど交換留学し、日本の生活を十分に体験してから決めたということで、万全の準備は、学校の申請がうまくいったということである。最初申請できた学校は東京大学と神戸大学であっ

た。結局、東大という日本における最高学府から届いた「研究生合格通知書」をさすがに断るようがなく、また、私が幼い頃から芸術家志望で、人形作りを続けており、東京には最も伺いたい大先生がいらっしまった。「夢を実現できるじゃない?!」と、心の中の興奮が抑えられない。だが、その時私のはっきり意識していなかったのは、これは確かに、まだまだ「夢」であるということ。なぜなら、全ての研究生が直面しないとしない大学院入試がある。それにもかかわらず、いざ東京に出発。

その結果、東京で一年半帰属感のない日々を過ごした。東京という国際大都市の広さと華やかさに対して、一人の寂しさを肌で感じていた。毎日銀座のアルバイト先と東大を往復しながら、試験の準備を押し進める。大学院の入学試験はただ筆記試験を受験するだけではなく、論文に基づく面接も行い、その両者を総合的に考慮した上で結果を決めるという形をとっている。だが、筆記試験の準備だけで精一杯な私は、何万字もの文章を四ヶ月以内で書かなければならない。今から振り返ると、東京生活は想像より難しかったのではないだろうかと思う。だが、いつでも行動派である私は、その不安と多忙な勉強生活の中で、自分の芸術家志望を忘れなかった。その結果、伺いたい人形の先生を見つけて、今も人形作りを続けている。今年までに、二体の作品が作りあげ、秋に東京と京都において開催する展覧会への出展を予定している。このことは私にとっては、重要な意味を持っている。

人形作りがうまくいった一方、東大に大学院生として入るのは結局「夢」の段階にとどまった。東大を二浪した私は、神戸大学がもう一度扉を開いてくれたおかげで、ようやく大学院に進学できるようになった。悔しい気持ちを整理しながら、東京の友人と先生に別れを告げ、慣れた生活からもう一度踏み出し、未来に対する不安を抱えながら、2019年の2月のある清々しい朝、新幹線に乗って神戸に向かった。

ちなみに、大学生時代に日本語を専門とした私は、芸術に対する抑えられない熱情で大学院の専門は芸術学に変更した。つまり、それまで芸術学という専門に対する認識は、全く白紙のようなものである。だが、もし東大における勉強は私と芸術理論との出会い、あるいは私の芸術研究の出発点と言うならば、神戸大学への進学は、本格的に私の研究方向を定めるとともに、そして最も重要なこととして、私と中国現代アートを出逢わせたきっかけになった。そう、自分の国の芸術であるものを、私は「出会う」という言い方を使ったのは、それなりの理由がある。

中国現代アートと私の間で架け橋になったのは私の指導教員大橋先生である。大橋先生のお勧めで、民芸（これはその前の研究テーマ）から少し離れ、それに関連する中国現代アートに目を向けるようになった。これまでは、中国の芸術を言及する際、中国の悠々で無限の世界を提示する山水画や陶磁器など、伝統美術しか思い浮かべなかつた。つまり、時間を現代に推し進めた時、「中国現代の芸術はどういうものなの」と聞かれたら、答えをすぐ返せないぐらい、中国現代アートについて何も知らないのである。その理由は、二つにまとめることができる。まず一つ目は、中国現代アートは政治的に弾圧されたことがあり、また政治に対立するような作品も多いことから、中国国内で評価を与える研究が僅かであり、また中国の教育体制に

おける普及度もかなり低い点である。（私が中学校や高校、さらに大学るとき、授業で中国現代アートを聞いたことはないし、歴史の教科書の中でそれを言及して議論する内容もほとんどない。）二つ目は、現在の中国の文化面が急速に成長した経済によって掻き乱された結果、大衆の目が惑わされてしまったという点である。その抑圧的で窒息した空気感の中に、中国現代の芸術を包括することは困難である。この状況は、研究を踏み込めば踏み込むほど、肌で感じている。中国現代の芸術の行き詰まりは、一面の「鏡」のように、文化の分野のみならず、全社会の諸々の問題を映し出している。それゆえに、その現実を踏まえて、さらに分析を加えながら、中国現代アートの可能性について検討することは、この研究の重要な部分である。

だが、どちらかと言うと、国外でしか自分の国の芸術に対して自由な発言ができないということは、まるで故郷に戻れない旅人のように、皮肉的に感じざるを得ない一方、自分の国を深く愛しているからこそ、悲しい気持ちが心から溢れる。また中国現代アートに関することを触れれば触れるほど、中国の社会現状における様々な問題をより肌で感じ、「現状からもう逃げてはならない！」と、心の中で一つの声が叫んでいる。

中国が直面している問題は、中国の外からよりはっきりと見えてくる。それは留学でわかるようになったことの一つである。なぜなら、中国自体は、五千年悠久なる歴史と伝統的な文化を誇りとして持っている国であり、中国の根底と基盤はそれによって織りなしている。さらに、近年の中国は、グローバル化によって国際的に重要な役割を担っており、世界の激しい動きに従って、変化がどんどん加速している。その急激な変化に応じて、考え方とイデオロギーの更新が求められる。だが、そのことは伝統文化の千秋の夢から覚めないといけないだろう。

ここで、私は、留学がその状況を打開する一つの道であると考えている。留学というのは、国外の生活を体験し、視野をより広げることを一つの目的とする。だが、それだけではなく、改めて自分の国の社会と文化を考え、革新的な思索を促すべきである。今の中国では、若い世代がどんどん国外に足を運んでいる。それは若者それぞれが抱える理想のためであり、自分の国を更新し、新しい空気をインプットするチャンスでもある。今の若い世代は、ただ自分に目を向けるだけではなく、その複雑かつ劇的に変化する世界において、社会的責任を少しでも担って、変革を求め、チャレンジする精神を持つことが重要である。それゆえに、私は、現実から逃げてはならない。これ以上黙ってはられない。14億の中国人の中の一人としても、それを自分の力で、せめて自分を説得できる形で、問題を明らかにし、言いたいことをはっきり言うことと決意した。このことは、今まで二十四年の人生における有意義な出来事の一つになるかもしれない。だからこそ、神戸大学に来てよかった、留学に来てよかったと思う。

留学で社会的責任感がより感じられたことのほかに、専門の変更を通して、素晴らしい先生と出会い、また様々な芸術に関わる人と交流することで、従来の芸術に対する考え方を刷新することもできた。芸術というのは、単なる絵画あるいは彫刻それ自体だけで定義するものではない。もちろん絵画であれ、彫刻であれ、何れにしても芸術ではあるが、「芸術は絵画のことです」と、そう簡単に断言できないはずである。なぜなら、絵画でも彫刻でも映画でも、それはただ芸術がとっている一つの形であり、そういった形で私たちは芸術を理解する。だが、芸術そのものは具体的なかつ物理的な形はなく、この世界に対して訴えたい気持ち、私たち個人なりの思想と感情といった流動的な意識そのものである。それを表現することで、様々な芸術の形

が形成し、その芸術が具現化されたのである。

最近でも東京にいる先生をメールで連絡を取りながら人形づくりを続けており、展覧会に出す予定のコレクションを完成させた。そのような芸術の実践を行いながら、芸術学における芸術作品に対する理論的展開により理解を深めることを行っている。私にとって、研究の指針の一つは、芸術を研究するならば、芸術そのものを、なんでもいい、自分の手で作ることは大事だ。自分の芸術作品を作るときの考え方と自分が表現したい感情を観察することで、傍観者の立場からではなく、参入者として芸術の本質を思索する精神は、自分の研究に裨益するかもしれない。すなわち、私の研究においては、理論と実践は離れない関係を持っている。

日本にきて留学するということは、私の二十四年間の人生で最も価値のある選択だと思う。この国で素晴らしい人と出会い、やり甲斐のあることが見つかり、やりたいことも続けられている。そう考えてみれば、東京での日々はつらくても楽しかったし、つらい以上のものがあつた。「留学に来てよかった」しか言えないぐらい、様々なことを経験させたその国と、勇気を持って行動できた自分を感謝している。

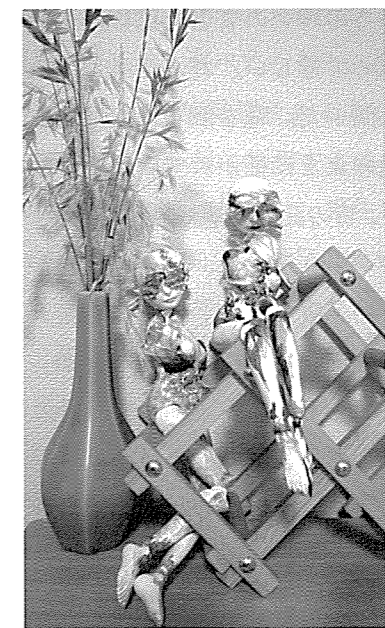


図 私の人形作品『春』

* 作品は原文のまま掲載しています。

優秀賞

忘れ得ぬもの

山根 彩花（英米文学専修 4 回生）

大学3年生の前期の授業で、カズオ・イシグロの『忘れられた巨人』を読み、私はすぐにこの冒険ファンタジーの虜になった。作中では、主人公である老夫婦が、確かにいたはずの息子を探して旅に出る。途中、「クエリグ」という竜のせいで国の人々の記憶が失われているのが分かり、道中で出会った勇者と共に、その退治へと赴く。無事竜を倒し失われていた記憶は戻ったが、そのせいで国々はかつての争いを思い出し、憎み合う。愛し合っているように見えた老夫婦の間にも、若い頃には裏切りがあったことが分かる。「忘れるべきか、覚えておくべきか」——イシグロが一貫して提起し続けてきた記憶に関する問いが、ここでも繰り返されていた。

もう1年以上も前に読んだ話なのに、折に触れて私はこの問いのことを思い浮かべる。答えるのが極めて難しい、だが簡単には放棄できない大切な問いだ。竜を倒し、記憶を取り戻すことが正義のように描かれていたそれまでの流れに反して、皆の記憶が戻ったラストシーンでは、夫婦の仲が引き裂かれ、再び国同士が争いを始めることが示唆される。主人公の老人は「忘れておいた方がよかったのではないかと妻に言う。それでも私は読了当時、「過去の過ちや苦しみを忘れて生きていくのは悪だ」と考えていた。たとえそれがどんなに醜悪で目を逸らしたくなるようなものであったとしても、なかったことにしたまま、日常の些事ばかり考えて生きていくのは不誠実ではないか。学期末のレポー

トではしっかりとした結論を出さずにはいたものの、内心最後の老人の言葉には共感できずにいた。

今思うと、それは私が歴史や記憶を「覚えておくべきもの」と教え込まれていたからかもしれない。東日本大震災がいい例だ。震災から8年経った今年の3月11日、各報道機関はこぞって震災関連の報道をし、そこには必ず「忘れない」という言葉が付されていた。あの日東北では何があって、人々はどんなことを思っていたのか。そこからどのように力を尽くし、街を復興させてきたのか。私たちはそれを忘れず、被災者を支援するとともに、得られた教訓を後世に伝えていかなければならない。現に自分たちがその後世の世代として、太平洋戦争や阪神・淡路大震災についての話を、年長の方々から伺う機会が多くあったのだ。絶対に忘れるな、と彼らは口を揃えた。また実際に、そこで語られた言葉は今も私の中に残り続けている。自分が人間という不完全な生き物である以上、そのような記憶の継承は当然の義務のように感じられた。

そう思っていた矢先、三宮の東遊園地で行われた今年の「1.17のつどい」に参加させていただく機会があった。式典のことは知っていたが、参加するのは生まれて初めてだ。朝5時に同行者と待ち合わせて、現地へと向かう。そこではすでに多くの人々が集まり、祈りを捧げていた。灯籠の光が、彼らを夜明け前の公園にくっきりと浮かび上がらせている。目を瞑って手を合わ

せる人、揺れるろうそくの灯をぼんやりと見つめる人、犠牲者の名前が刻まれた石板に献花し、俯いた顔から涙をこぼす人——24年前神戸が負い、そして今も消えることのない傷を目の当たりにした瞬間だった。その場にいた何人かの方々と話をする。私と同年代ほどの女性は、「あの日、近所の人々が幼かった自分を瓦礫の下から救い出してくれた。皆がいたから、今の自分がある」とひそやかな声で語る。また別の男性は、当時の仕事や避難生活、そして震災関連死で喪った知人のことを教えてくださいました。彼はかすれた声で「その方が亡くなったときは、やっぱり、悔しかったです」と言い、それきり口をつぐんだ。結局のところ私は、美しい港町としての神戸しか知らなかったのだ。街は変わっても、その根底にある思いや記憶は変わらない。その事実に触れて衝撃を受けると共に、「忘れない」というのが本当に正しいことなのか分からなくなった。アナウンスのあと黙祷のための時報が鳴り、5時46分52秒になった瞬間、水を打ったような静寂に誰かの慟哭が聞こえた。それは、「忘れ得ぬ」ことの苦しみではないか。

さらに、それから約2か月後の3月11日、読売新聞に掲載された「閉じこもる男性」という記事を読んだ。福島県の被災地では今、復興住宅に引きこもり誰とも交流しない、一人暮らしの男性が多くいるらしい。彼らは大方50～60代ほどで、高齢で体が動かせないというわけでもないが、その状況に身を置いているのだそう。私はこれを知り、再び同じ戸惑いを覚えた。彼らが家の中で実際に何をしているのかは誰も知らないし、推測でものを言わない方がいいのかもしれない。だがやはり私には、その部屋の中に東日本大震災という大きな出来事が横たわり、男性はその記憶の中で生活し続けているように思えてしまう。変わり果てた街を目の当たりにするよりは、孤独を選び、失われたものを偲び続けているのではないか。そんな方た

ちに「忘れず、伝え続けろ」と言うのは、あまりにも酷な気がする。

これら二つの経験を通じて、またイシグロの問いを考えるようになった。「どんなに辛い記憶でも、忘れない方がいい」と屈託なく言えたのは、私が一度も当事者になったことがなかったからだろう。私は被爆者でも、戦争体験者でも、被災者でもなく、専ら自分のことしか考えていない大学生に過ぎないのだ。だから当事者の方の話は、忘れてはいけない出来事を知り、同時に思いを馳せるいい機会となった。だがそれは、琵琶法師から『平家物語』を聞くようなもので、感情移入しながらも自分の日常とは切り離された「非現実」だったのかもしれない。今まさに生きる当事者その人は、忘れ得ぬ記憶から自由になることはない。そんな苦しみなら、誰にも何も語らず、そのまま忘れてしまった方が幸せなのではないか。いよいよ私は、イシグロの問いに対する答えを見失ってしまった。

そんな中訪れたのが、「神戸レインボーハウス」である。甲南山手駅付近にあるこの施設は、阪神・淡路大震災後の1999年、震災遺児の心のケアを目的につくられた。現在は、震災遺児のみならず、様々な事情を抱えた学生たちが併設された寮に入居している。私は知人からその存在を聞き、自分でも調べてみると、折よく20周年の記念イベントが開催されるとのことであった。施設の中を外部に公開するのは初めてらしい。俄然興味の湧いた私は、寮生たちが中心になって企画し、「地域交流祭」と題されたそのイベントに参加してみることにした。そこに行けば、探し続けている答えのヒントが見つかるかもしれないからだ。

緊張しながら受付を済ませ中に入ると、既に多くの参加者たちが、それぞれ話しながら部屋中を見回している。大きなホールには、5つほどの班ごとに数個の机と椅子が並べられており、自分の案内された班には、施設の職員の方

1人、私と同年代くらいの寮生数人と参加者5、6人が座っていた。驚いたのは、赤ちゃんからご高齢の方まで、老若男女問わず様々な参加者が来ていたことである。彼らから口々に語られる「どんなところなのかずっと気になっていた」という言葉は、「神戸レインボーハウス」があるいは阪神・淡路大震災そのものが、どれほどの存在感を持って地域の人々に受け止められてきたのかということを表していた。

「神戸レインボーハウス」には、震災遺児たち一人ひとりの心の状態に対応できるよう、多種多様な部屋がある。円形のソファとたくさんのぬいぐるみが置かれ、リラックスして話ができる「おしゃべりの部屋」や、天井からサンドバッグがぶら下がり、壁全体が柔らかいため、怪我することなく感情を爆発させることができる「火山の部屋」がその例だ。案内された中で特に印象的だったのは、やや狭い部屋にソファが一つだけ置かれた「おもいの部屋」である。ここで子供たちは一人になって、故人を思ったり、泣いたりするのだという。実際に座らせてもらおうと、ソファは座り心地が良く、天窓から差し込んでくる光は優しくかった。訪問前はなんとなく暗く重い場所を想像していたので、建物全体を包む明るく優しい雰囲気面に食らった。

一通り部屋を見て回った後、一緒に行動していた職員の方にその驚きを伝えた。施設の壁に埋め込まれた石板、そこに名前を刻まれた支援者一人ひとりが出て、職員の方や遺児たちの懸命な戦いもあって、今この施設はすごく明るいですね、と。すると職員の方は、じっとこちらの顔を見てから、次のように言った。

「でも、あったことをなかったことにはできないんよね」

それを聞いた瞬間、自分はとても恥ずかしいことを言ってしまったと思った。後悔している間も、彼女は続ける。

「毎日泣き暮らしていたのが、週1回になって、月1回になって、年1回になる、それが心の復興だと思う。だけど、完全に忘れて生きていくことはできない」

自分ではどうしても分からず、恥を承知の上で尋ねた。「心の復興を遂げるためには、何が必要ですか。この施設の子供たちのように、たくさんやりたいことをして、私生活を充実させることでしょうか」

それも大切だけど、と前置きしたうえで、こう返ってきた。「つらい時に無理せず泣いたり、思いを吐露したりする場かな。私は、特別なことは何もしてなくて、ただ相手の気持ちをずっと聞いてきた」

職員の方の発したこの言葉こそ、イシグロが私たちに問い続けてきた難問への答えの一つのように思われる。「忘れるべきか、覚えておくべきか」、この二択のどちらかを選び、どちらかを捨てる必要はないのだ。私たちは、忘れ得ぬものを引き受け、心に抱き続けながら、生きて前へ進むことができる。「覚えておきながら忘れていく」という、論理の上ではあり得ない矛盾を、震災遺児に寄り添い続けた職員の方は目の当たりにしてきた。そしてそれを成し遂げるために必要なのは、言葉だ。それも理路整然としたものとは違う、複雑な思いの絡まり合った生の言葉である。

22年間生き大学で人文学を学んだ私にとっては、この矛盾、入り組んだ言葉こそ不完全な人間の人間たる所以であって、また同時に、そんな人間に起こし得る唯一の奇跡であるように思えて仕方がないのだ。

* 作品は原文のまま掲載しています。

佳作

二日酔いの男と哲学の講義

上田 慎（哲学専修 4回生）

自己紹介が好きではない。正確に表現するのなら、自己紹介の中で「文学部です。」と言うことが好きではない。さらに正確には、私が「文学部です。」と言った時の、それを聞いた人達の反応が好きではない。私の調べによると、自己紹介の場で文学部生を目の前にした際の周りの反応は2通りしかない。「なんで文学部なん」あるいは、「なにするん」。私が自身の学部を告げると、このどちらかが投げ返される。そしてこの関西弁を発する表情には、少しばかりの嘲りが添えられていることが多い。この表情が好きではないのだ。そして、何より私は私自身が文学部生であることが好きではなかった。

文学が嫌いなわけではない。文学を学んでいる、ということが好きではなかった。私は、「なんで文学部なん」という質問にも、「なにするん」という質問にも、私は明確な答案を持ち合わせていなかった。前者には「なんとなく」、後者には「わからん」と答えるということだけは決めていた。自分のことなのに、この学部を選んだ理由も、ここで何を学び、何になるのかもわからなかった。それが恥ずかしかった。周りの人にその答えを迫られているように感じた。いつしか、初めて足を踏み入れた時、私の胸を躍らせ、これからの大学生活を期待させた六甲のキャンパスまでも、そこにいる理由と目的を私に迫るだけのものになっていた。

気が付くと私は、自分の中から「文学部である」という要素を削ぎ落していた。そこにいる理由と目的がわからなかったのだ。次第に大学からは遠ざかり、2回生になるとサークルとアルバイト、時々麻雀の生活を送った。幸い、そんなことを私に忘れさせてくれるくらいサーク

ルは充実したものであったし、居酒屋のバイトは忙しかったし、麻雀は言うまでもなく楽しかった。(麻雀にはまるあまり、英語の授業で麻雀についてのプレゼンをし、そしてその単位を落としたという話はここでは控えておこう)

三回生の夏にサークルを引退してからは、バイト漬けの生活になった。夕方になるとバイト先の居酒屋に行き、深夜まで働いて家に帰り、昼過ぎに起きてまたバイトへ行く。昨日と同じような今日を過ごすだけの、そんな時だった。1人の男が、店のキッチンに加わった。彼はもう50歳近くなることを嘆いていたが、茶目っ気のある性格は、歳を感じさせることがなく、彫の深い目元と整った顔立ちは、若いころはモテたんだろうなと私に易く想像させた。無精ひげの中にちらほら隠れている白い毛が唯一彼の歳を証明している。「ダンディ」という言葉を体現しているような男だった。料理の腕も良く、私の勤める小さな居酒屋の中で一躍人気者となったその男であったが、少し問題があった。いなくなるのである。それも営業中に。「トイレ行ってきます。」と言ってふらふらとキッチンを離れると、1時間は帰ってこない。帰ってきてても飄々としている。手がおぼつかない時もある。平たく言おう。二日酔いである。この男は、昨日飲んだのであろう焼酎の香りを漂わせながら出勤することがよくあったのだ。しかし、男はどこか憎めない人だった。店長には怒られていたが、当人はあまり気にしていないようだったし、私を含めたアルバイトも(もちろん社会人としてどうかとは思いますが)「しっかりして下さいよ。」と笑いながら言うだけだった。その姿は、中学の時、馬鹿をやった先生に怒ら

れている同級生を思い出させた。

とある日の営業時間も過ぎた頃に、男と店を片付けていると、飲みに行かないかと誘われた。居酒屋のキッチンの多忙さは、私の飲酒欲求を高めるには十分であった。行きつけだという小料理屋に連れて行ってくれた。男は我が家のように店に入り、カウンターの椅子を引きながら「いつもの。」と店主の顔も見ずに呟いた。端っこではスーツを着た若い男性が1人で飲んでいた。男と同年代くらいであろう店主は、グラスに氷をカランとこぼし、慣れた手つきで芋焼酎を注いだ。二日酔いの原因はこの店だったんだと、1つの謎が解けた気分ではビールを頼んだ。

空になったグラスが4杯、5杯と並ぶ頃には、店主もスーツの男性までも巻き込んで、他愛もない話で笑っていた。ふと男が、私に「ちゃんと勉強してるんか」と聞いてきた。痛いところを突かれたと思ったが、「学校はほぼ行かずにバイトするか遊ぶかです。」と、なんとなく正直に答えた。「学生は勉強しないと。」という有難い説法を予想していた。しかし、男の反応はそんな私の想定を裏切るものだった。「ええ事や。若いうちは全力で遊んどき。」と、赤くなった顔で笑いながら私に言ったのだ。まさか最近の自身の生活が肯定されるとは思っていなかった。その時、私は理解した。この男がどこか憎めない理由を。「後ろめたさ」がないのだ。皮肉ではなく、文字通りの意味で自身に後ろめたい気持ちがない。二日酔いの酒臭い体で料理を作っている時も、そこに悪びれた様子はなく、「まあ昨日楽しかったからいいや」と言わんばかりの調子である。男はいつも自分自身を肯定しているように見えた。悪く言えば反省していないのだが、私にはそれが羨ましく思えた。

始発の電車が動き出す時間になり、店を出た。男が憎めない理由について理解したことが、私の中の何かを劇的に変えたなんてことはない。ただ、それはガラガラの電車に乗って1人で揺

れている私に、ある講義のことを思い出させたのだった。

2年前、1回生の時に受けた哲学の講義だ。「哲学とはどういう学問か」というテーマだった。「生物学」や「経済学」ならこのような問いに答えることは容易だろう。名前の通り、前者は生物について、後者は経済について探究する学問である。しかし「哲学」とは何なのか。他の学問に倣って、「哲」について探究する学問だ、という説明には無理があるだろう。そもそも哲学という学問の「哲学」という名前は、西周が「philosophy」の訳語として生み出した。しかしこの英語の「philosophy」という言葉も、それとは別の言葉から生まれた。そして、その基の言葉というのが「philosophia」である。この単語の意味を知ることが、「哲学とは何か」という問いに対する答えを教えてくれるのである。「philosophia」という単語は、その意味から「philo」と「sophia」の2つに分けられる。前者は「愛」、後者は「知」をそれぞれ意味している。つまり、「哲学」という学問は、本来の単語の意味から「愛知学」と訳することができる。「愛知」、すなわち「知ること愛する」ということは、「知ることを目的としている」ということと同じである。何か他の目的があって学ぶのではない。例えば、教習所で車の運転の勉強をすることは、知ること自体が目的ではなくて、ただ「知る」ということを愛し、「知る」ということを目指している。上述の問いに答えるとしたら、「哲学」とは「知ることを愛する」学問なのである。

話を哲学の講義から電車に揺られる私に戻そう。1回生の時は、何の気なくこの講義を聞いていた。この話はテストに関わってくるのか、ということだけが当時の私の関心だった。しかし、かろうじて私の頭の片隅に佇んでいたこの講義の内容は、二日酔いの男から発見した「後

ろめたさ」という考えと、妙な仕方で混ざり合い、私の頭の中に1つの意外な問いを生ませた。

「どうして私は、私が文学を学ぶことを後ろめたく思っているのだろうか。」

思えば、私が大学から遠ざかった1つの要因は、文学を学ぶことへの「後ろめたさ」だった。時代の流行りは、目に見えて人々の役に立つような実学だ。何を実学とし、何をしないという線引きは分からない。だが、文学は例えば医学のようにわかりやすい形で、人々の為になるのだろうか。文学を学んでいることを、周りの人は意味のないことだと思っているのではないか。そんなことに熱心になることは恥ずかしいとさえ感じた。私の中では、「なんで文学部なん」という言葉も、「なにをするん」という言葉もそんな周りの人々の考えを象徴しているものだった。そんな気がしてならなかった。だから、文学を学ぶに値する目的と理由を探した。私が文学を学ぶことを私自身に納得させたかったのだ。

だが、そんなものは必要なかった。哲学という学問の本質がそうであったように、私はただ、知るということを愛していた。「愛していた」というと仰々しく聞こえるが、私はただ知ることが好きだった。文学について知ることが好きだった。高校三年の時にこの学部を選んだのは、自分の勉強がいつか誰かの役に立つことを願っていたとかではなく、ただ文学を学ぶことが好きで、ただ文学について知りたかったからだ。それだけのはずだった。文学が好きで、もっと知りたい。文学を学ぶことに、それ以上の理由も目的もいらなかった。そんな単純なことに気が付くと、文学に対して感じていた「後ろめたさ」はどこかへと消えていった。それは私が自身に勝手に課していただけのものだった。私は私が好きなものを、好きに学べばよいのだった。

「文学の必要性」だとか「文学の意義」を熱心に世の中に説く文章を見かけることがある。ここには、大なり小なり文学を学ぶことへの「後

ろめたさ」があるのではないだろうか。だが、ある日の哲学の講義が教えてくれたように、知ることが目的なのである。いわゆる実学と呼ばれる学問に対して、では文学の意義だとかを考えることは、もちろん有益であると思うが、必ずしも必要ではないのかもしれない。また、私はいわゆる実学を批判する気も全くない。哲学という言葉から、「知ることを愛する」というその学問の本質を得た。だがこの本質は、哲学だけではなく、あらゆる学問の本質であるような気がしてならない。すなわち学問の本質とは、知ることを愛すること、そして知ることを目的とすることではないのか。学問を修めたことによって、結果的に誰かの為になることはある。ただそれはあくまで結果的なものであって、またそれが起こりやすい学問とそうではない学問もあるということなのだろう。重要なのは、「知ることを愛する」、そして「知ることを目的とする」ということである。前者は学問に携わる理由で、後者は目的である。無理な理由付けも、背伸びをした目的も必要ではない。ただそれだけで十分だと私は思うのである。

4回生の春、私は取りこぼした授業に追われる日々を過ごしている。「2.3回生の時にしっかりと学校に行って単位を取っておけばなあ」と感じることは多い。だが、「後ろめたさ」はない。私は私を組み立ててくれるどの要素に対しても、「後ろめたさ」を感じるのを止めにした。大学から離れてサークル活動に明け暮れた時間も、バイトに費やした時間も、麻雀を打ち続けた時間さえも、今の私を形作ってくれているはずだ。そしてもちろん、文学部生である、という要素にも何の「後ろめたさ」は存在しない。ただ、私は文学を学び、知ることが好きで、だから知りたいのである。気が付けば、私を構成する全てのものに「後ろめたさ」を持ち合わせることがなくなった。今では自己紹介も悪くないかもしれない。

* 作品は原文のまま掲載しています。

新人賞

学びたいこと

石田 七海 (1回生)

初めに、どうして私が神戸大学の文学部を選んだのかについて述べる。まず文学部を選んだ理由は、本を読んだり、映画を見たり、美術館に行くのが好きで、でもただ鑑賞するだけではなくその作品たちに込められた意味や含まれている時代背景を知りたいと思ったからである。ではなぜ他の大学ではなく神戸大学を選んだかというと、文学部で社会学を学べるからである。高校三年生になり、大学について考え始めたときは文学や美術を学べるところに行きたいとしか考えていなかったが、学部などについて調べてみると社会学という分野が何を勉強する学問なのかを知った。すると、私が今まで頭の中で考えたことや疑問に思っていたことが社会学で学ぶことができるかもしれないと思い始め、そうして自分の大好きな文学や映画を学ぶことも、自分がずっと気になっていたことを学ぶこともできるこの場所を選んだ。そして今から私が長く関心を持ってきたいいくつかのことについて、このレポートで述べようと思う。

1つ目は戦争についてである。私がこのことに関心を持ち始めたのは小学生の時である。きっかけは私の小学校で6年間かけて行われる平和学習だった。私の小学校では8月6日に平和登校日があり、その日に向けてクラスで『ヒロシマの有る国で』という歌の練習をする。当日は午前8時15分、原爆が広島に落とされた時刻に黙とうを行い、被爆した語り手さんの話を聞き、そのあとは縦割り班ごとに分かれて6年生が班の下級生に戦争をテーマにした絵本を読み聞かせ、最後に小さな紙に自分が戦争について思ったことを書き、その紙を学校の一番大きなガラスが張ってある掲示板にハトの形など

に合わせて貼る。毎年行われるこの行事によって、私は直接ではないが戦争というものに触れ、戦争について考える機会が1年生の時から与えられた。しかし、実際1年生の時の私はそれほど戦争に関して興味を持っていなかった。ところが2年生の時に、修学旅行で広島に行った6年生が平和記念資料館や語り部さんから聞いた話をもとに、脚本や衣装も自分たちで作る6年間の平和学習の集大成として行う平和劇を見て引き込まれた。この劇も前の年に見たときはあまり理解していなかったし、長い間床に座って見ているのが辛いと思ったことくらいしか覚えていない。だが、2年生の時は自分の縦割り班の班長で優しかった6年生が出るので、その人が目当てで真剣に見ていた。すると、劇の中ではあるが身近な人が戦争に巻き込まれている姿を見て、私は戦争というものの恐ろしさを理解した。それからは毎年恒例の平和登校日も平和劇を見ることも全く面倒だと思わなかったし、自分が6年生になった時には戦争に関する調べ学習も大阪戦跡巡りも修学旅行も、そして平和劇も戦争について学ぶことができるので楽しみだったし、意欲的に取り組んだ。また、小学校ほどではないが中学校でも沖縄に修学旅行に行き、沖縄戦についても学んだ。主に小学校での平和学習という経験によって、私は今でもふっと戦争について調べたいし、戦争に関する映画などには特別興味を持つ。そのようなことを通して私の中に浮かび、消えない疑問は、単純だが「どうして人は戦争をするのか」ということだ。戦争といっても要因は様々であるし、しょうがないという面もあるかもしれないし、途方もくれないような疑問かもしれない。

私もこの疑問の完璧な答えにはたどり着けないだろうと思う。しかし、だからと言って諦めようとは思いたくない。歴史を通して戦争は悲惨で、人を壊すものだと分かったはずなのに人が戦争を選ぶ理由に少しでもいいので近づきたいのである。また、原因に近づくことで戦争をなくすることができるかもしれない。

私たちは戦時中に生きたことはないし、戦争について調べるといっても語り部さんや資料を通してでしか学ぶことは出来ない。だが、私たちに話を聞かせてくれる語り部さんの数はどんどん減ってきている。だからこそ、私たちが目を背けずに戦争というものを知ることが大切だと考える。そしていつか、戦争なんてものを知らなくてもいい時代が来るようにしたい。

次に私が学びたいことは、差別である。差別といってもひとまとめにはできないほどそれぞれが深刻な問題ではあるが、私が特に関心を持っているのは性差別である。その中でもLGBTQについて述べる。このLGBTQに関する差別は少しずつ衰退しつつあるが、なくなっただけではない。それに、日本ではいまだに同性婚が認められていないし、私も完璧に理解しているとは思わないが、LGBTQについて正しくない知識を持っている人がいると感じられる。例えば今の日本ではすべての人がパートナーと不安を抱えずに生活を送れるわけではない。同性愛者だけに限ることではないが、特に同性婚は法律上認められていないので、パートナーに何かあった時に守ることができない場合もある。パートナーシップ制度を行っている自治体もあるが少数であるし、やはり結婚ほどの力を持たない。それに、パートナー同士の愛の在り方は何も結婚だけではないだろうし、たとえば結婚してなかったとしても好きな人と安心して暮らせるようにするべきだと考える。

私がLGBTQというものを初めて知ったのは、中学生の時に買った海外のゴシップなどが載っ

ている雑誌である。その雑誌には男女カップルの破局ニュースと一緒に女性同士のカップルの破局ニュースも載っていた。それを見て、それまで持っていた同性愛者に対してどうして抱いていたのかは分からないが何となくあった違和感は消え、男女のカップルであっても男性同士もしくは女性同士のカップルであっても人を好きにならなくてもいいのだと思った。また、今まで私が出会った映画も、家族の在り方は決まっていなかったことや自分のジェンダーは生まれた性別の通りに従わなければならないということではないことなど多様性を教えてくれた。人は自分の好きな在り方でいいはずなので、同性愛などを受け付けない人もいて良い。だが、多様な人の在り方を認めずに否定し、批難して良いわけではない。そもそも、人がどのような人を好きになったとしても、結婚しても、周りに不都合があるのかと思う。ない。

これまで私は少しだけだがLGBTQについて述べてきたが、何も「LGBTQをみんなで受け入れよう」と呼び掛けているのではない。なぜならその考えは異性愛者前提の世界での考えのように私は感じるからである。例えば、自分が同性愛者であることを打ち明けるカミングアウトにも感じる。カミングアウトをするかどうかは本人の意思によるものだから、したいのならばしてもよいと思う。だが、いずれ打ち明けなければいけないとは考えたくない。それは、異性愛者は自分が異性愛者だと打ち明けることがほとんどないからだ。私はどのような人を愛そうが、人を愛しまいが、性自認がどのようなものであろうが、まだ分かっていまいが、すべての人がそのことによって虐げられることなく、自分の好きなように生きられる、対等な世界を求めている。

差別というものも戦争と同じように人が作り出したものであり、社会に根強く残っている。問題自体が複雑で、根絶するのは難しいと

考える。しかし、今現在多くの人が差別を無くしみんなが幸せに暮らせるような社会にするために立ち上がって声を上げている人がいる。そして、本当に差別を無くそうとするならば、差別の被害にあっている当事者だけの力では足りないし、とてつもない時間がかかるのではないかと考える。周りの人も自分には関係のないことと思わないで、差別の被害にあっている人々の上げていく声に気づき、手を差し伸べて、横に立って進んでいけたならば良いと思う。そのためにはやはり、今起こっている差別やその差別の背景にあるものに対して正確な知識を持つことが大切である。だから、自分の興味のないものだからと言ってはねのけずに、知って理解するというところに貪欲になることを忘れずに意識していきたい。

私はまだ専修が決まっておらず、このレポートで主に社会学で学ばれる分野で私が学びたいことを述べたが、正直に言うとこれから社会学を専攻するかは分からない。美術史や芸術学など他の分野を専攻するかもしれない。だからと言って、私が今まで関心を持ってきたことを捨てるわけではない。社会学を専攻しなかったとしても違う方向からでもそれらの問題について学んでいきたいと思うし、それができるのが文学部だと私は思っている。そして、戦争や差別などについては大学の勉強だけで終わるものではない。今まで学び経験したこと、そしてこれから大学で知ることを通して一生学んで考え続ける人になれるように、これからの4年間で多くのことを吸収していきたい。

* 作品は原文のまま掲載しています。